

牡丹鍋

能村 研三

能登への思い

先師登四郎の名は祖父能村和吉の生まれた能登にちなんで付けられたと言う。能村の「能」、登四郎の「登」を繋げると「能登」。能村家にとって能登はかけがえのない父祖の地であり能登への思いは強い。

明易く祖父の地のふところか登四郎御墓辺に空蟬ひとつ天降らす
(羽咋の釈迢空の墓)

日本海青田千枚の裾あらふ

昭和二十九年、登四郎は第一句集『咀嚼言』の後記を書いた翌日、句風の脱化をはかるため、ひとり金沢、能登に旅をした。父祖の地である金沢・能登を選んだのは自分のルーツを探るためだった。また羽咋にある釈迢空の墓に詣でる旅でもあった。

南風吹いて壁紅殻の塗師の家

平成六年、父と輪島に住む沖の仲間て輪島塗師である中津正克(我門行男)さんを訪ねた時の句で「塗師の家」の句は、登四郎の即吟で、その場で色紙に揮毫した句はいつも塗師の家に掲げられている。

私は俳句を始める前、昭和四十三年大学一年の時に初めて能登を訪れた。北陸線の夜行列車で一人津幡に

噓して次の噓を待てる顔

銀紙のうらも銀紙クリスマス

数へ日や朴はや太き芽ごしらへ

煤逃の緋色の裏地翻し

連想の始めは雲や枯野道

凭るるに良き柱とられ牡丹鍋

寒波来る櫛は枝を密に張り

音立つるもの焚き加へどんどの火

火の方へ掃き寄せてゆく落椿

初電話録音させていただきます

降りて、海沿いの松林を走る一輛電車で能登一宮に向かった。父が敬愛する釈迢空の墓に詣でた後、能登一宮の氣多大社を参拝した。十四年前に父が能登に惹かれたのと同じように私も初めての一入旅の行き先に能登を選んだ。この後、輪島から狼煙の祿剛崎を巡った後、時国家なども訪れた。

一月一日におきた能登半島地震には身も心も震撼させられた。早速、富山の道端齊さんに連絡をしたところ沖の誌友の様子をつぶさに教えてくださった。

能登の誌友である輪島の我門行男さんは、輪島で被災されしばらく避難所で過ごされた後、中能登の鶴宿に近いところに家を借りられたという。七尾市の坂下成紘さんは家屋を半壊されたが、そのままご自宅で過ごされている。会員の小島史子さんは震源地の志賀町にお住まいだが、金沢に避難されているという。

氣多大社の私の句碑は早速道端さんが無事を確かめて下さり安堵した。暁闇に大空へ飛び立っていった神鶴と共に、能登半島を襲った地震から一日も早く復興できるよう祈りたい。

能村 研三